

地域おこし協力隊通信

第28回

リポーター
小林正英 隊員



右・小林
左・森山元隊員

皆さんこんにちは！28回目の協力隊通信です。
今回は、令和3年潮来市地域おこし協力隊活動報告展示会について、小林目録でお話しします。
8月に退任された森山隊員もこの協力隊通信でお話ししていた活動報告展示会。その中で、地域おこし協力隊としての活動についてプレゼンさせていただく機会をいただきました。私がテーマにしたのは「今後の活動について」。私が着任してからの8か月間についてお話ししても良かったのですが、この展示会のために作成した協力隊冊子の中で、協力隊の活動についてまとめたので、これまでのことはそちらに任せて、プレゼンでは、今後の協力隊の活動についてお話しすることにしました。



活動報告展示会の様子

しかし、活動方針を述べるにしても、単に自分がやりたいうことを自分勝手につらつらとお話するのは、説得力が足りないですよ。実現できるのか？正しい仮説の立て方をしているのか？等、疑問が残ってしまう。そこで、こういう時に私がよくやることなのですが、本を頼ることにしました。専門家の書いた本を参考にすることで、説得力の不足分を補う形です。参考にしたのは、地域おこしに関する研究者の本。ここで紹介したいのがスベースの都合上割愛させていただきます。
その結果私がたどり着いた今後の活動方針は「地域おこしは少数精鋭のチームが必要なので、今後は仲間集めをしていきたい」ということ。ただし集める仲間についても、条件があり、どの本にも共通して書いてあったのが「やる気のある人」。あなたの周りに地域おこしについてやる気のある人はいますか？いればぜひ紹介してください！



今後の活動についてプレゼン

まちづくり・潮来の自然と歴史を知る

潮来市の誇れる自然

第66回

今夏も盛況！全国の大学生向け公開臨湖実習

茨城大水圏フィールドステーション（潮来市大生）は、全国の大学生が水辺の環境問題について体験的に学べる実験所で、文科省から教育関係共同利用拠点に認定されています。以前は夏休みに各地の学生が泊まり込みの実習に来てくれましたが、コロナ禍ではそれができません。この状況下でも学生たちに学びの機会を提供できないかと、昨年からはじめたリモート臨湖実習が、いま、少しずつ盛り上がってきています。

8月9～11日の公開実習「追跡！巨大ナマスー湖沼の外来生物問題の最前線」には、東洋大や帝京科学大、茨城大の学生が参加しました。この実習では、まず、霞ヶ浦で外来ナマスが引き起こしている問題やその対策についてリモート講義で学びました。次いで、霞ヶ浦の現場から当ステーション所属の学生たちが生中継動画を配信。最後に、各地の学生の独自調査（アメリカザリガニ、都市公園池での水抜きによる駆除、ブラックバス、先進県の外来種対策等）の報告を経て、全員で議論し、外来種問題について理解を深めました。

8月16～20日の公開実習「巨大湖の生態系と環境問題―霞ヶ浦や他地域の湖沼での調査・実験から理解する」には、北大や東京薬科大、筑波大、日大、茨城大の学生が参加しました。水質や生物群集、生態系に関する講義や霞ヶ浦からの生中継動画配信のあと、調査キット（水質・生物調査用）で学生が自宅近くで独自調査し、その報告について意見交換しました。

学生が暮らす地域の現状を報告してもらえ、当ステーションのスタッフにとっても新鮮でした。各地の学生たちも霞ヶ浦と自宅周辺の水辺を比べながら、水環境の持続的な利用について学び、地域の魅力を再発見する良い機会となったようです。茨城大地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション
加納 光樹・碓井 星一



動画の受信画面



実習で採集された生きもの



投網での採集風景



生中継動画を撮影しているところ